

2025年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として 1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者（団体）、あるいは活動・研究を計画している者（団体）を幅広く対象とします。

（B）活動・研究助成金	
対 象：学部学生・大学院生（個人・団体）	面接日時：2025年5月中を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
支 給 額：総額20万円	
採用件数：1～2件程度	面接会場：ZOOM ミーティングにて実施予定
選考方法：書類審査・面接	備 考：採用者（団体）は活動・研究の中間報告を10月末に提出の上、最終的な報告書または論文を翌年1月中旬に提出すること。提出された活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。
提出書類：①活動・研究助成金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書 (A4用紙3枚程度 書式自由)	

書 類 提 出 期 間：2025年4月1日（火）～2025年4月30日（水）まで

書 類 提 出 先：ジェンダーフォーラム（gender@rikkyo.ac.jp）に添付ファイルで提出

採 用 発 表：5月下旬（予定） 学生課奨学金掲示板（池袋／新座）、10号館掲示板、立教時間、フォーラムHPに掲載する

授 与 式：6月上旬（予定）

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金（A）・（B）の申込書（願書）の利用目的】
標記の申込書（願書）で取得した個人情報は、奨学金採用者（団体）の選考および発表のために利用する。採用者（団体）の論文・報告書等は「年報」に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。
以上に同意した上で、申込書（願書）を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、「立教大学プライバシーポリシー:個人情報取扱に関する基本方針」（ https://www.rikkyo.ac.jp/privacypolicy/ ）を参照すること。
※（A）ジェンダーフォーラム論文賞の募集は10月に行います。
※申込書、願書はホームページ上からダウンロードできます。（ https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/ ）
※詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。
ジェンダーフォーラム事務局（池袋キャンパス6号館1階） Tel:03-3985-2307 E-mail:gender@rikkyo.ac.jp

立教大学ジェンダーフォーラムのご案内

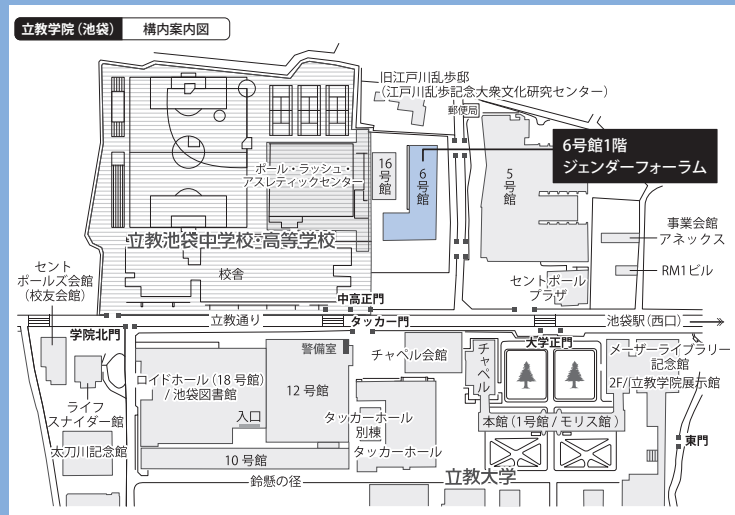
「常識」とらわれず、性差やセクシュアリティ（性自認・性的指向など）についての問題を本音で語り合い、考える場、それがジェンダーフォーラムです。ジェンダー（gender）とは、社会や文化の「常識」にしたがってつくられた性差のこと。「女／男らしさ」「女／男役割」や異性愛を「あたりまえ」とする考え方もそのひとつです。「常識」「あたりまえ」とみなされている性をめぐる社会通念・制度・規範には、一人ひとりの個性的なあり方を抑圧するものが少なくありません。ジェンダーフォーラムは、女子学生寮ミッチェル館（1998年閉館）の精神を受け継ぎ、ジェンダーについての教育・研究拠点として1998年に誕生しました。ジェンダーに関する身近な違和感をもっている方から学識を深めたい方まで、様々な人に広く開かれています。より多くの人々が、自分自身の問題として社会生活における「ジェンダー」に気づき、理解し、考える契機となるよう、公開講演会やジェンダーセッション、コーヒーアワーなどを開催しています。

開 室 日：毎週月曜日～金曜日
開 室 時 間：10:00～16:00
場 所：立教大学池袋キャンパス6号館1階
TEL：03-3985-2307
E-mail：gender@rikkyo.ac.jp
URL：https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/gender/



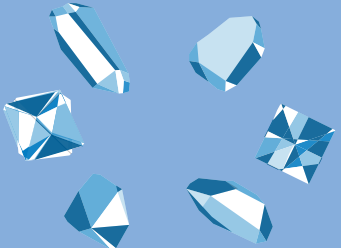
6号館1階の入口付近です！





GEM

Vol.52 2025.03.31
Rikkyo Gender Forum News Letter



Gender Forum
Rikkyo University



Gemとは…命名時には本フォーラムがその精神を受け継いでいる立教大学女子寮ミッチェル館（1998年閉館）の“M”にちなんだものでした（Gender Encountering in Mitchell）。現在はさらなる発展を企図して、ジェンダー平等の実現を目指すことを意味する Gender Equality in the Making とし、ニュースレター、メーリングリストの名前として使用しています。

第94回ジェンダーセッション（2024年11月14日（木））

「がん啓発キャンペーンのジェンダー事象——乳がん・子宮頸がん・前立腺がんの啓発ポスターから」

登壇者：菅森朝子氏（本学社会学部メディア社会学科助教）

第94回ジェンダーセッションは、これまで乳がんを体験した女性を対象に研究をする菅森氏が、がん啓発キャンペーンポスターをジェンダーの視点から分析、考察するものだった。しかも、乳がんのほか子宮頸がんや前立腺がんも取り上げるといふ。乳がんに罹患し、その体験を活かし患者支援活動に携わる私にはとても興味深く、心を弾ませながら会場に向かった。

セッションでは、複数のポスターが紹介された。そのひとつに乳がんサバイバーの私がサバイバー仲間と話題にしたことのある記憶に残るポスターがあった。

2021年、日本対がん協会が主管とするピンクリボン大賞でグランプリ作品となったポスターだ。「まさか、私が」とポスターの上部に大きな文字。その下のイラストには、福引の当たり玉。イラストの下には、「と毎年9万人が言う」という文字が小さく続く。そんなポスターであった。

「がんを福引の当たりとするのは一体どういうことなの?」、「既に当たりを引いた患者はどうでもいいの?」、「検診を受けていてもがんになっちゃう人もいるのよ」。このようなお喋りが患者会や院内サロンで繰り返されたのを覚えている。

クローズドである居心地の良いサード・プレイスでの出来事だけならこのポスターに火の手が上がることはなかった。が、誰でもが容易にソーシャル・メディアを活用する昨今、このポスターは公開後、瞬間に波紋が広がり、翌年、当協会はお詫びをする事態に陥った。

近年、SNSで当事者が容易に発信することができるようになったことで社会へ与えるインパクトは非常に大きく、病いと向き合う主体を疎外している問題がクローズ・アップされた、と菅森氏は鋭く指摘した。

概して、乳がんの啓発ポスターは、乳房という身体の一部がパーツ化されているのに対し、子宮頸がんや前立腺がんの啓発ポスターでは決して身体を描かず、妻や母親、娘といった家族、あるいは、仲間や医療者の顔と視線で構成され、その視線を通じてメッセージを強めているという。

がんの啓発ポスターには、ともしれば患者を疎外してしまう問題をかかえている。それゆえ、社会ががんと向き合い、がん患者支援とともにがん撲滅に向けた啓発活動が行われ、今後は啓発ポスターのあり方を模索していく必要がある、と菅森氏は締めくくった。

最後の質疑応答では、ハイブリッド開催だったため、オンライン聴講者からの質問や意見も多数寄せられた。また、男女それぞれに見られる代表的な前立腺がんと乳がんについて、ジェンダーの視点から関連な議論が繰り返されたことも興味深く、普段、がんサバイバーが語り合う見方とは異なり、とても刺激的であった。

今、私は、患者の人格を尊重し、かつ尊厳に配慮しつつ、臨床研究でいかに患者市民が参画できるかを患者市民の立場から仲間と探究している。患者市民参画についての考察にジェンダーの視点を加味することの重要性に気づかされたセッションであった。

齊藤嘉子（本学大学院 社会デザイン研究科修士）

「人は変わる、関係も変わる：自分自身の個別具体的な生について語ること」

登壇者：金川晋吾氏 (写真家)

一見カジュアルに見えるポートレート写真。しかしそれらは、男らしさを強調することで価値を見出されてきたいわゆる「写真家」の作品とは異なる問いを、映し出している。気鋭の写真家・金川晋吾さんの作品には、セクシュアリティや家族といった社会規範へのアンチテーゼが、静かに、そして確固としたアート精神で貫かれている。

「father」という作品集は、金川さんが子どもの頃に何回か失踪した父親が映し出される。ひょっこり帰ってきたその中年男性は、息子に寝顔や仏頂面を撮影され、どこか心許なく、従来の「男らしさ」の規範から外れた人生を歩んできたように見える。その父親に息子は、「子バカ」とも言える愛に溢れたまなざしで、カメラを向ける。

「明るくていい部屋」という写真集は、自身のポートレートを含め、数年来同居している彼の「親密な家族」のプライベート写真だ。男性2名、女性1名ではじめた同居は、途中からもう1人男性が

加わった。単なるシェアハウスと異なるのは、1人の女性と男性たちが性的関係にある(あった)ことだ。金川さんはそれを「ボリアモリー」(同意に基づき複数のパートナーと親密な関係を持つ人／状態)という言葉で表現しようとする。

写真はボリアモリーな人々の暮らしを客体とするまなざしではなく、親密関係の「自分語り」の実践として映し出される。彼らは揃ってアーティストであり、自分たちのプライベートを作品化しているともいえる。写真という媒体を通して、わたしたちは彼らの家を覗き見しているような錯覚に陥る。自宅でくつろぐ彼らは、ときに居間に寝そべり、ときに性を隠さない裸体で、ときに男女がベッドで寝入っている。家族とは、男らしさ・女らしさとは、恋愛・性役割とは何かを、写真は観る者に問いかける。

金川さんは「『一般的にはこうなっている』と自分は感じたり思ったりするけれども、その『一般』はどこかにはっきりと存在しているわけではありません。はっきりと存在していないものに対して、

何かを言うことには不安がつきまといます」と書いている。「私は恋愛にじっくりこないのは、自分に原因があるのではないかという疑念をもってしまっています。『自分が悪い』と思うことは、自分にとってしんどいことではあります。だけど、実は自分が感じているもやもやに対して、手っ取り早くてわかりやすい答えを与えてくれます。でも、本当は、そんなふうに思いたいわけではないんです」。では、どんな風に思いたいのか、その答えを写真は語ろうとしているのだろう。

ジェンダーセッションでは「人と異なったことをしている自分の行動や、恋愛について話すことは恥ずかしいことだと思う。アーティストとしてこんなことをやっている人は他にいないので。その恥かしさがあります」と、プライベートを曝け出すことを照れながらも、カッコつけずに正直に話していた。

かつてコミュニケーションなどで、恋愛が混在する小集団は存在したが、概ね家父長制のパワーバランスの上に成り立っていた。男性のヌード写真も、ゲイが愛でる作品として1960年代くらいから登場してはいた。しかし「明るくていい部屋」のプライベート空間には、かつて男性性と呼ばれた見栄や権威性や力はふわりと消されている。それが、観る者の脳の一部分を刺激する。セクシュアリティ

の多様性はいつも、ジェンダー思想を根底から揺さぶり、その概念を拡張してくれる。男／女、恋愛／性愛、包摂／排除、L G B T。分断されてきた社会規範の既製服をそのまま着ることに違和感を感じ、それを写真と言葉で正直に表現する金川さんはとてもかわい

い、と思う。「明るくていい部屋」の親密性は、アニメ「サザエさん」のような日本の家族規範を破壊する。しかしそれは、彼らの親の世代、つまり戦後生まれ第一世代がそれまでの規範にもがき苦しんだ姿を見て育った子どもたちがたどり着いた、家族の形なのかもしれない。親世代も1970～80年代にはLove & Peaceを謳っていたはずなのだ。

家族とは幻想なのか。あるいはセクシュアリティと同様、解体され、拡張し、新たな幻想として作り換えられていくものなのだろうか。

菊地 栄 (本学大学院 社会デザイン研究科兼任講師)

「映画『裸足で鳴らしてみせろ』上映会&トークセッション」

登壇者：工藤梨穂氏 (『裸足で鳴らしてみせろ』監督)、久保豊氏 (映画研究者、金沢大学人間社会学域国際学類准教授)

今年度のジェンダーフォーラム映画上映会では工藤梨穂監督『裸足で鳴らしてみせろ』(2021)を上映しました。この作品は『オープンズ・ブルース』(2018)で第40回びあフィルムフェスティバルにてグランプリを受賞した工藤監督が、日本映画を代表する監督たちの商業デビュー作を送り出してきた「PFF (びあフィルムフェスティバル) スカラシップ」の第27弾として製作したもの。父の不用品回収会社で働く直己(佐々木詩音)と、盲目の養母・美鳥(風吹ジュン)と暮らす槇(諏訪珠理)は、「世界を見てきてほしい」という美鳥の願いを叶えるために、レコーダーに録音した音で旅の記録を捏造し、偽りの旅を繰り返しています。二人は次第に惹かれ合っていきますが、想いを告げることも触れ合うこともできないまま。そんなある日、想いを募らせた直己が突然、槇に拳をぶつけたことをきっかけに、二人は格闘を通して互いに触れ合っていくことになるのですが――。

映画の上映後には工藤監督と映画研究者で金沢大学准教授の久保豊さんをお迎えしてのトークセッションを開催。その前半では久保さんがクイア批評の手法を使って映画を解説しました。「欲望と映画体験」や「触覚と映画」の関係についての映画研究の蓄積を紹介しつつ、映画のなかの「接触」や「触覚」の表象に着目しスクリーン上の具体的な細部を読み解いていく久保さんの解説は、これまで

映画研究や映画批評に接する機会の少なかった観客にも、映画を観るための新たな視点を提供するものでした。

後半では久保さんから工藤監督へ質問を投げかけるかたちでお二人の対談へ。キャスティングの経緯や俳優の当事者性について、登場人物の立ち上げ方と脚本の書き方、演出の仕方、過去の工藤作品とのつながりや他の映画監督からの影響など話題は多岐に渡り、来場者からも多くの質問が寄せられました。容易には名づけがたい関係を描いた映画をめぐる実作者と研究者のトークセッションは、観客にとっても得るものの多い対話になりました。

『裸足で鳴らしてみせろ』は2025年2月現在、U-NEXTで独占配信中。『ジェンダーフォーラム年報』26号には久保さんによる関連論考も収録予定です。是非、合わせてお楽しみください。

山崎健太 (ジェンダーフォーラム教育研究囑託)

フォーラム着任の挨拶

はじめまして。2024年12月にジェンダーフォーラム事務局に着任した、大野聖良(おおのせら)といたします。

事務局に勤務する傍ら、女性の移住労働(自国を離れて海外で働き暮らすこと)やその過程で起こる搾取の問題について研究しています。近年はフィリピン女性やその子どもたちの移住労働に興味を持ち、入管政策やNGOの支援活動を調査しています。また、東京近郊の大学で非常勤講師としてジェンダー論や人権に関する授業を受け持っています。

さて、「着任の挨拶」として、私がどうしてジェンダー研究に携わるようになったのかについてお話ししたいと思います。

私は中部地方の出身で田畑と農家とジャスコ(現・イオンモール)しかない場所に一人っ子として生まれました。近隣住民の苗字は「伊藤」「尾藤」「竹内」のどれかで、「本家」「分家」という区分を中心とした地縁の濃いコミュニティで育ちました。それに居心地の悪さを感じていた私は「ここではないどこかに行きたい」という気持ちが募り、地元から通えないほど遠距離の大学ばかりを受験していました。運よく都内の大学の法学部に合格し、とてつもない解放感に包まれながら上京し、一人暮らしが始まりました。両親は「関西ならまだしも、東京に一人娘を出すなんて気が知れない」と周囲から言われていたようです。

しかし、希望に満ちていたはずの大学生活では司法試験至上主義というマッチョな雰囲気に対応できず、「女子大生」という価値づけに嫌気がさし、就職氷河期の就職活動では面接官に地方

出身の一人娘であることを度々心配され、「なぜ私は東京で男として生まれなかったのだろう」と何度も思いました。そのような惨めさを感じていた大学四年生の秋、たまたま図書館で『法女性学のすすめ―女性からの法律への問いかけ』(金城清子著、1983年)という古い本が目に入りました。それを読み進めるうちに、これまで自分の中にあった違和感がすべて学問として説明されていることに衝撃を受けました。この一冊を起点に「女性学」「ジェンダー研究」という領域があることを初めて知り、「どうしてもこれを学びたい」という気持ちが抑えられず、周囲の反対や心配をよそに、大学院進学に嬉々と方向転換したのでした。2004年秋にあの本を見つけていなかったら私はここにいません。

長々と私の物語の一部を書いてみましたが、皆さんは何がきっかけで「ジェンダー」や「セクシュアリティ」という言葉を知りましたか。最近、何に関心を持っていますか。事務局には皆さんの興味関心に応えてくれる書籍や映像資料が多く所蔵されています。ジェンダーに関することで知りたいこと・考えたいこと・話したい事がありましたら、ジェンダーフォーラムにぜひお立ち寄りください。

大野聖良 (ジェンダーフォーラム教育研究囑託)